



自然・ひと・体験

編集：日本野外教育学会広報委員会

発行：日本野外教育学会事務局

〒305-8574 つくば市天王台 1-1-1 筑波大学体育系野外運動研究室内

TEL&FAX. 029-853-6339



日本野外教育学会第26回大会 北海道教育大学岩見沢校

特集 博士号取得奮闘記

巻頭言「アウトドア活動の中で『森林科学』を考える」井上 真理子

2~3

特集 博士号取得奮闘記

4~7

飯田稔先生を偲んで

8~9

第26回大会速報

10

事務局便り

11~12

巻頭言

「アウトドア活動の中で『森林科学』を考える」

井上 真理子（森林総合研究所多摩森林科学園）

北海道で開催された第26回大会のエクスカージョンで登別市ネイチャーセンター「ふおれすと鉾山」を訪問し、清流でリバートレッキングを体験しました。子どもの頃に近所の川で遊んだのとは違い、ヘルメットとPFDを身につけて急流を目指しました。波しぶきが立つ所では、全然前に進めず（写真）、野外教育プロフェッショナルの皆さんが嬉々として先に進むのを追いかけてながら、水流の激しさを実感してきました。こうした「水の流れ」の体験は、筆者の専門である「森林科学」の専門教育でこそ必要な活動ではないかと強く感じました。「森林科学」は、森林の管理や保全を自然科学や社会科学の視点から捉える実学的な総合科学で、山地の保全に関わる治山（ちさん）治水（ちすい）や溪流の流れについても学びます。山でのアウトドア活動は、「森林科学」に通じていて、自然をみる多様な視点のひとつともいえます。



登別市ネイチャーセンターでのリバートレッキング

ここで「森林科学」についてご紹介します。日本森林学会は、1914（大正3）年に創立し、会員約2,500人を擁し、森林・林業を総合的に扱っています。研究テーマには、環境の保全や林産物の供給などの森林の価値や機能に関する幅広い内容を含みます。森林生態系の研究や、野生動物の調査などの自然科学、国土の保

全や水の流れを学ぶ砂防学、大気や気候変動、さらに、林業など木材生産は山村地域の暮らしも関わっています。木材の貿易や林道の設計、溪流保全などの応用科学も含み、研究分野は14に及びます。専門教育は、農学部などで森林科学科や関連するコースや類型が約30の大学にあり、卒業生の半数近くは林野庁や都道府県などで森林の専門的な公務員として活躍しています。

「森林科学」は、簡単に言えば、森林に関わるあらゆることを研究しています。樹木が何でも分かる牧野富太郎博士のような人から、気象観測データの分析の専門家、森林の政策を考える社会学者もいます。野外調査を行う肉体派には、木の保育や土の専門家、狩猟や森林レクリエーションの専門家、さらに土砂災害の現場でヘルメットをかぶっている防災の専門家もいます。「森林科学」には、物理、化学が得意な人に限らず、数学や人文社会科学が得意な人もいて、誰でも自分にあう分野を見つけられる懐の広さがあります。筆者は、森林教育を研究しています。

筆者が経験した「森林科学」の専門科目の一部を紹介します。

- ・ 樹木学（基礎）：牧野植物図鑑が必読書で、演習林での実習では、樹木の標本づくり（約50種類）を行います。学生は大きなビニール袋を抱え、先生が紹介する樹木に群がって、葉を採取します。
- ・ 測量学（基礎）：山地の地形を測るため、測量道具を抱えて道なき道を歩き回ります。最近ではドローンの観測技術も発達しています。
- ・ 森林計画学：樹高と直径を測り、森林の大きさを調べます。将来の森林の様子や木材生産量の予測と共に、炭素固定量も推定します。計測では、衛星などの技術も発達していますが、正確さの確認には、地上での計測が欠かせません。
- ・ 造林学：日本の気候に適した林業樹種として、スギとヒノキが代表的ですが、種子から成木するまで

育てる保育施業（ほいくせぎょう）を学びます。一般に、斜面の下部にはスギ、上部には乾燥にも強いヒノキを植えます。各地に適した品種があり、スギ花粉症を防ぐため、花粉が少ないスギや花粉が出ないスギも開発されています。

- ・ 森林利用学（林業工学）：木を伐採し、搬出するための林業機械や林道などの森林土木などを学びます。最近では、操作室に乗ったオペレーターがアームを操作し、樹木を伐採して集材も行える高性能な機械もあります（写真：飛行機のcockピットのようにハイテク機器に囲まれた操縦席）。



高性能林業機械（プロセッサ）



高性能林業機械の操縦席

- ・ 砂防学：山地の斜面の崩壊メカニズムを学ぶ「砂防学」。土砂の強度、水流の計測、土留め工法までを含みます。河川が急こう配な日本で発展しており、“SABO”は国際用語です。

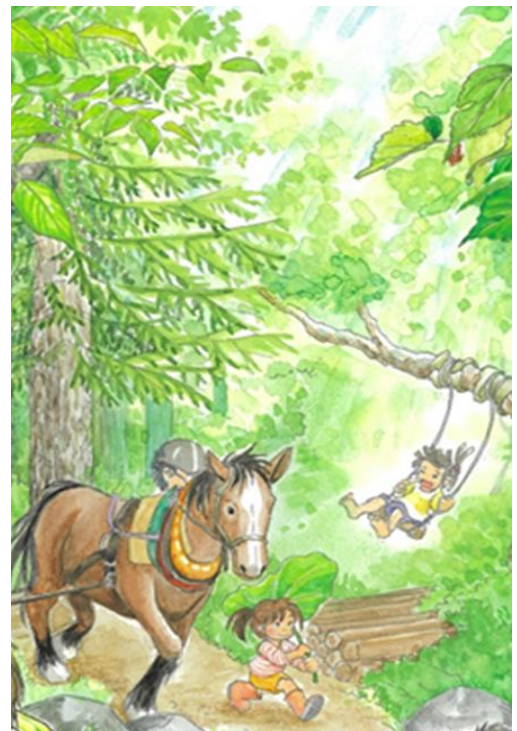
「森林科学」には、他にもたくさんあり、全体を詳しく知るのには難しいですが、森林に関わることに広く目を配り、災害を防止し、林産物を生産しながらも生態系を保全するなど、バランスを保つ視点があるとい

えます。国際的には、持続可能な森林経営に向けて、森林への理解を図る Forest Education が注目されています。

話を冒頭に戻すと、訪問した「ふおれすと鉱山」では、100年の森林構想のもとで、市民と協働での森林（もり）づくりが行われています。今回のエクサカーションは、アウトドア活動を通じて、森林と人との深いつながりを感じられる機会になりました。これからも、さらに野外教育と森林科学のつながりが深まり、双方で高め合えればと思います。

北の森漫画 展示紹介

第26回大会（北海道教育大学岩見沢校、2023年）は、北海道らしく「森林」に注目した企画がたくさんありました。基調講演は、北海道大学の苫小牧研究林の中村誠宏林長による北海道の森林のご紹介でした。また、口頭発表の会場のそばでは、北海道森林管理局の協力のもと、「北の森漫画」の展示が行われました。漫画は、林野庁職員の平田美紗子さんが、楽しく森林・林業・木材産業の魅力を伝えるために描かれているものです。林野庁の林野図書資料館または北海道森林管理局のホームページで、森林官の仕事を紹介した「お山ん画」、林業紹介（人 to 木）、木の絵本も閲覧できますので、ぜひご覧ください。



作 平田美紗子（林野庁北海道森林管理局）

特集 博士号取得奮闘記

近年、野外教育分野においても博士号を取得される方が増えてきました。当分野の発展に多大な貢献をもたらす博士号ですが、取得までの道のりは三者三様です。今回は4名の方の取得までの奮闘記をお伝えします。これから博士号の取得を考えている方やすでに歩み始めている方へのエールになればと思います。

蓬郷 尚代 (中央大学)

私は東京海洋大学の千足耕一先生指導のもと 2015年3月に「海辺の体験活動が参加者の海洋リテラシーに及ぼす影響」を学位論文とし、東京海洋大学大学院海洋科学技術研究科 博士後期課程 応用環境システム学専攻を修了しました。社会人入学をし、仕事をしながら学位取得に臨んだ経緯や過程を紹介します。

なぜ海洋科学の門戸をたたいたのか

20代の頃からスクーバダイビングインストラクターとして指導やガイド活動をしていた経歴があったことから、当時はいくつかの大学からスクーバダイビングの集中授業にお声がけいただき、指導者として手伝える機会が増えてきたところでした。当時勤めていた上智大学でもスクーバダイビングの集中授業を立ち上げることになり、自分の実習での意義を考えつつ、安全管理や安全教育を改めて考えていく必要性を感じていました。海での安全を考えていくなかで海には海の見え方が必要で、一概にアウトドアスポーツとして一括りにはできないことを感じていた時期でもありました。その頃、以前から親交のあった千足先生が鹿屋体育大学から東京海洋大学に異動され、博士課程の道を進めてくださったことがきっかけとなり大学院受験を決めました。2010年10月に千足先生に主指導教員になっていただき、週の半分以上は夕刻から大学に向かい勉強する日々を過ごし、千足研究室博士課程の第1号として修了することができました。

研究室活動と研究

当時(2010年)は海洋スポーツ・健康科学分野として2つの研究室が合同で月に1回ゼミを実施していました。ゼミでは学部4年生、修士課程(社会人も含む)、博士課程(社会人)、研究室博士課程OBなど多くの研究室関係者が集まり研究の進捗報告や発表をし、お互いに実験を手伝ったり意見をもらうなどして大きな研究チームといった感じでした。現在は千足研究室の

みで月に2回、学部3年生から博士課程までが一堂に会しており私はOBとして参加させてもらっています。在学中、私が自分に課していたことは、関係している海洋に関する学会では必ず発表をすることでした。国内外合わせて年に3-5回は発表の機会があったため、常に調査やデータ整理をしていた印象です。今になって振り返ると、修了するまで着手した研究を学会発表や論文としてまとめていく作業を続けられたことが学位論文作成に向けて良いトレーニングになっていたのだと思います。

学位論文にたどり着くまで

学位論文のテーマを固めるまでには、スクーバダイビングの事故事例を過去20年に遡って調べたり、海洋スポーツに関わるいくつかの研究に携わらせてもらいました。実践や調査をしつつ海洋スポーツに関する様々な研究領域に触れていくなかで学位論文に関連するテーマである「海洋リテラシー」にあたり、海外では海洋リテラシーの考えが浸透しつつあるなか日本の風土に合った海洋リテラシーを評価できるものがないことがわかり、対象となる年代別の評価票の開発に着手することにしました。

学位を取得して思うことは、自分の足でコツコツと情報やデータを集め、多くの議論をするなかで学び、粘り強くテーマに取り組む姿勢を身につけることだったように感じています。そうすることで自然と自分の研究分野の視野が広がり、そのなかでのテーマが明確に見えてくるように思います。私の場合は、フィールドワークをしていくなかで海洋ジャーナリストやスキンドайビングの現役アスリート、エコツアーガイドなど多くの方々と繋がりを持つことができました。また、一流の方々と一緒に活動させていただく機会も増えたことでSUPやシーカヤック、スキンドайビングをはじめとする自分のスキルも磨くことができました。その最たるものは沖縄の伝統船であるサバニの操船技術かもしれません(まだまだ発展途上です)。今

後もライフワークとして続けていく覚悟ができたほど、サバニとの出会いは私にとって衝撃的な出来事で、サバニを通じて知り合えた多くの人々は私の財産となっています。

山田 亮 (北海道教育大学岩見沢校)

私は、2019年4月に、岩手大学大学院連合農学研究科地域環境創生学専攻(通称:岩手連大)に入学し、2022年3月に、博士(農学)を取得しました。この研究科は、岩手大学、山形大学と弘前大学の農学系の連合大学院で、私は岩手大学配属、森林・環境教育研究室(指導教員:比屋根哲先生)に所属して、3年間、大学教員の仕事をしながら博士課程の学生生活を送りました。

山梨大学の修士課程修了後、いつかは、野外教育研究につながる分野での学位取得を目指したいと考えながら、大学教員生活を送っていました。そんな中、私は、野外教育学会第20回大会のシンポジウムで登壇した際に、他学会との連携を図っていくのはどうかと発言をしました。それがきっかけで、森林総合研究所の大石康彦さんと井上真理子さんにお誘いいただき、その年度中に、第131回日本森林学会大会の森林教育をテーマとする企画シンポジウムで、非会員ながら、発表をする機会を得ました。その時に感じたこととして、自身が活動する野外教育のフィールドのほとんどは森林環境下で、その森林をいろいろな角度から深く理解することは必要不可欠なことではないかと考えました。また、森林学会では、森林環境が人に与える影響を心理学的、生理学的に検討していたり、森林環境と地域とのつながりなどの社会学的な研究などもみられ、野外教育に関わる視点が数多く検討されていると理解しました。そして、自身の今後の方向性を考えて、博士課程への入学に至りました。

岩手連大では、社会人用の入試・カリキュラム、授業料減免に係る制度、全ての授業が短期集中形式など、遠隔地に住む社会人学生としては非常に通いやすい環境が整っていました。特に授業では、農学の社会科学系、自然科学系問わず、さまざまな分野に触れる機会がありました。カリキュラムは、博士課程で自身の研究分野を掘り下げるだけでなく、幅広くさまざまな分野に関する見識を持てるようにするという

意図があると聞きました。授業を通して、その分野の最新トピックスを理解し、「自然」に対する理解の幅が一気に広がったと感じています。同様に、他分野の教員や学生と関わる機会があり、自身の研究分野と内容をわかりやすく伝えなければならない機会が何度となくあったおかげで、野外教育の考え方や実践、研究について基本的なところから見直すことができました。また、語学、統計学、プレゼンテーション技法、研究倫理、論文の書き方などを勉強する機会があり、大学教員として必要なスキルを学ぶことができました。博士課程への入学は、学位取得という目的だけではなく、大学教員の学び直しの機会としても非常に大きな価値があると感じました。

そしてここからは、博士論文作成の話になります。受験前の相談から入学後も、比屋根先生からは、自分(山田)が最も得意とする野外教育の効果に関する研究に取り組み、森林教育に通じるような研究を期待するという助言をいただき、これまでの野外教育の効果研究を踏襲しつつ、新たな取組ができればと考えました。そんな中、野外教育学会第21回大会(信州大学)での実験的研究の分科会とその後の第1回研究集会において、國部雅大先生(筑波大学体育系助教、スポーツ心理学)から、調査対象者が1名(N=1)でも量的研究を可能とする「単一事例実験計画法(シングルケースデザイン)」の存在と考え方、それを野外教育研究にも応用できるのではないかと教えていただきました。この方法は、応用行動分析学、理学療法学などで研究事例があり、対象者の属性にそれぞれ特徴があることから、一人の事例を客観的に検討するために用いられています。野外教育研究では前例がありませんでしたが、この理論と先行研究を理解して、野外教育の効果研究に導入するという試みをテーマとして、博士研究を進めていきました。

研究を進めていく中で、当初から、シングルケースデザインの条件設定と分析方法の複雑さに手を焼き続けていました。考え方と条件設定の可能性をいろいろと整理して、研究室の検討会やオンライン研究会でプレゼンをして、比屋根先生をはじめ、岩手連大の先生方から、数多くの指導と助言をいただき、試行錯誤を繰り返しながら進めていきました。そして、日本森林学会教育部門の方々のご支援のおかげで、日本森林学会誌に原著論文としてひとつの成果を残すことができ、博士論文完成に向けた骨子ができました。最終

的に、仕事や家庭の状況、自身のモチベーションや健康問題などから執筆時間の確保がなかなかできず、博士論文提出を延期することを考えましたが、「提出できる条件が揃っているなら、勢いでいきなさい」と比屋根先生や職場の教授からはげましをいただき、なんとか提出するに至りました。最後の最後には、大学教員の仕事を20年弱経験してきて、その中で考えてきたことがあったからこそ書けた文章だなど、20歳代のころにはまったく考えもつかなかった内容だなど思いながら、書きました。最終の学位論文審査会を乗り切れたのも、今のタイミングだったからだなど感じています。

1999年に野外教育学会第2回大会が、東京農業大学で開催され、私は学部生ながら参加していました。思い返すと、講演やシンポジウムを拝聴し、農学、森林科学や造園学の存在と、野外教育におけるその学問領域の意義をなんとなく感じてはいたとは思いますが、これこそ、今になってようやくその意味を理解し始めた気がします。

野外教育は、体育・スポーツ科学に限らず、学際的な複合領域です。野外教育の研究内容は多様で、研究者のキャリアも多様であるべきかと思えます。この報告をきっかけに、もっとこういう系統の野外教育の研究者が増えていけばと願いますし、野外教育学会の会員のみなさんには、日本森林学会(2024年3月8日～10日、東京農業大学)にもぜひご参加いただきたいと思えます。

中丸 信吾 (日本女子体育大学)

私は2017年に当時勤務していた順天堂大学にて博士の学位を取得しました。博士論文のテーマは、「Characteristics of bone metabolism in middle-aged and older mountaineers (中高年登山者における骨代謝の特徴)」です。この研究では、中高年男女の定期的な登山実施者の骨代謝の特徴を明らかにするために、骨代謝を評価する指標(骨代謝マーカー)や身体組成などを測定し、ウォーキング実施者、運動習慣のない者と比較しました。その結果、女性については明確な差異を見出すには至りませんでした。男性では登山実施者は運動習慣のない者に比べて骨代謝回転が活性化していることを明らかにしました。

博士論文執筆の過程で特に印象に残っていることは、専任教員のスタートと大学院生のスタートが同じタイミングだったため、博士課程の3年間で目の回るような忙しさだったということです。しかし振り返ると本当に充実した3年間でもありました。当時は、授業や実習、会議などの学内業務を行い、博士論文の実験や執筆を行いながら、時間を作ってゼミ生や仲間とフィールドに必ず出かけていました。スキーの準指導員を取得したのもこの時期でした。出かけるときは強行スケジュールばかりでしたが、野外教育の専任教員として教育・研究・フィールドのバランスを持って取り組むことが大切だと明確に意識するきっかけになった時期でした。

研究を進める上で苦勞したことは、登山愛好家の被験者を探して研究協力を得ることでした。採血のための環境条件をクリアした上で、限られた被験者に同意を得なければならなかったため、被験者を集めることにはかなり苦勞しました。また、生理学的指標を用いた分析手法は、自身ではこれまでにあまり馴染みがなかったため、苦勞しながら多くのことを学びました。分析に用いた指標が何を反映しているのか、その原理を理解することや、データをどのように解釈するかといったことを、先行研究を辿ったり専門の先生に教えていただきながら必死に勉強をしました。

博士を取得して思ったことは、「学ぶことは楽しい」ということでした。私の場合は修士を取ってからかなり期間が空いてから博士の取得を目指しました。また、専任教員として大学業務を行いながら大学院生として勉強していたため、限られた時間の中で必死に取り組んでいました。当時とはとにかく必死でしたが、終わってみると博士課程の3年間は、知的な好奇心が掻き立てられ濃厚な学びを得た貴重な時間でした。大学教員の業務はマルチタスクであるため、研究以外にもたくさんの業務を遂行しなければなりません。野外教育の専任教員として、知的な好奇心を持ち続け、フィールドの中に入ることを忘れずに、これからも教育・研究・フィールドに積極的に取り組んでいきたいと思っています。

今回は博士号取得奮闘記ということで、僭越ながら私の体験談を書かせていただきました。これから博士取得を目指す方にとって少しでも参考になれば幸いです。

佐藤 冬果 (東京家政学院大学)

私は、筑波大学と鹿屋体育大学の共同専攻である「大学体育スポーツ高度化共同専攻」で、坂本昭裕先生のご指導のもと、2021年3月に博士(体育スポーツ学)を取得しました。この専攻は「大学体育や大学スポーツの充実・発展へ寄与する実践研究と、それに基づく教育実践の循環を促進できる高度専門職業人としての大学教員の養成」を目的としており、2年目には、研究の審査だけでなく、授業等の実践的教育能力の審査も行われます。大学教員となった今、この専攻で広く大学教育について学べたことが日々のお仕事の基盤になっています。現職の先生方の在籍が多い専攻ですが、これから大学教員を目指したい院生の方々にもおススメです。

大学体育に関する専攻ということで、「野外教育」と「大学体育・大学教育」を繋ぐ研究キーワードを考えたとき、着目したのが“self-authorship (SA)”の概念でした。修士時代に読んだ海外論文に「この(キャンプによる)学びはSAの概念と似ている」という1文があり、この謎の用語はなんだ!と、蛍光ペンで線を引いて保管していたのがきっかけです。SAは大学生の成長理論の1つで、物事(自己、対人関係、知識)を認識し、意味づける主体を自分の中に持つ能力です。アメリカでは、SAの能力が基盤となって、高等教育で求められる21世紀型の学修成果が修得されるという文脈で研究が進められており、野外教育分野でも検討が進んでいます。

それをふまえ博士論文では「Self-authorshipの育成に向けた野外運動を教材とした大学体育に関する研究」と題し、SAの発達を効果的に促進する大学体育授業モデルを構築することを目的に、①理論研究、②SA評価尺度の作成、③授業モデルの開発と実践、④授業の効果検証(アンケート調査・レポート分析)、⑤

SA発達に寄与する要因の検討(インタビュー調査)の5つの研究を行いました。盛り沢山でしたが、広い研究手法に触れることができたことで、大きく成長できたと感じています。

博士課程に入って良かったと思うことのひとつが、野外教育以外の分野の研究者との交流です。修士時代は「野外教育を学びたい」に留まっていた意識が、博士課程に入り、SA研究という接点で国語教育や教養教育、発達障害支援…などの専門家と出会う中で、野外教育を客観視し、他分野との関連のなかで「野外教育の立場では何ができるか」を考えられるようになりました。逆に辛さを感じていたのは、修士課程修了後、就職をせずにそのまま学生を続ける形で進学していたので、(今思えばとても幸せな環境なのですが)「論文を書く」以外にやるべきことがなく、逃げ道がないことでした。研究が行き詰まると「皆は働きながら研究を進めているのに」と周囲と比較して自己肯定感を下げ、「働きもせず研究も進まない私って…」と自分の存在価値を見失い、「博士取ったところで結局は無職の可能性あるしなあ」と年齢を気にしながら将来への不安を募らせていました(いずれも世の博士学生あるあるですね)。それでも、同じ研究室の仲間達や先生方との関わり、研究の楽しさがそれを上回る充実感を与えてくれました。やり切った自信と、乗り越えたことで得た武器(学位)が、今を支えてくれているように思います。

最後に、これから進学を検討されている方に僭越ながら一つお伝えするとすれば、研究計画を丁寧に検討しておいて良かったな、と思っています。入学前に時間をかけて坂本先生と検討した研究計画が筋道となってくれ、あまり右往左往することなく修了までの3年間を一気に走ることができました。本専攻に興味のある方など、私でお答えできることは情報提供いたしますので、ご連絡いただければ幸いです。

飯田稔先生を偲んで

本学会の第5代会長を歴任された飯田稔先生が2023年4月23日にご逝去されました。先生は1997年の学会設立の中心的役割を果たされ、長年にわたり本学会を牽引いただきました。我が国における野外教育の発展に多大なる貢献をいただいた飯田稔先生を偲び、平野吉直先生、遠藤知里先生より共に過ごした時間を綴っていただきました。

飯田稔先生を偲んで

平野 吉直（日本野外教育学会 会長）

日本野外教育学会の理事長・会長を歴任された飯田稔先生が、令和5年4月23日に逝去されました。飯田先生は、日本野外教育学会が設立された1997年から2012年まで、6期15年にわたり理事長を務められ、2012年から2015年までは、第7期の会長を務められました。学会設立では中核的な役割を果たされ、日本野外教育学会の礎を築き、その発展に多大な貢献をいただきました。飯田先生を偲び、教え子の一人として思い出のいくつかを、感謝の意を込めて綴らせていただきます。

飯田先生がペンシルバニア州立大学で博士号を取得され、筑波大学に着任された1977年から、筑波大学野外運動学研究室の学部生・大学院生・研究生・準研究員として9年間にわたり、お世話になりました。先生のもとで20代を過ごした数々の経験から学んだことは、野外教育の場に身を置く私の道標であり判断の物差しになっています。

大学のキャンパス内に飯田先生命名の「野性の森」というキャンプ場を整備することが計画されました。予算があまりなく、「古い電柱をもらってきたから、これを何本も立てて、「野性の森」の看板を掲げたゲートを作ってくれ」・・・地元の土建屋さんにもセメントの混ぜ方を教えてもらい、芸術専門学群の木工作業室で道具を借りて看板を作り、電柱を立てて「野性の森のゲート」を学生の力で完成させました。その後、炊飯場、トイレ、課題解決ゲームのエレメントの手作りが続きました。

学生時代の夏休みは、飯田先生（キャンプネーム：ゴリラ）が代表を務める「幼少年キャンプ研究会」が主催する子ども対象のキャンプ指導者として、毎年40日間程度、バラギキャンプ場（群馬県嬲恋村）で過ごしました。「キャンプで使う薪を、無料でわけてもらえるところを探してほしい」「バラギキャンプ場まで資材を運搬するトラックを、どこかで安く貸してくれ

ないかなあ」・・・地元の製材工場や自動車修理工場に掛け合って実現できました。バラギキャンプ場で子どもの受け入れ準備をしている際、2万5千分の1の地形図を見ながら「この万座川の支流を詰め、二つの滝を越えて野地平に戻ってくるコースを下見してくれ」・・・滝を迂回するのに手間取り、沢の上でビバークして翌日キャンプ場に戻り、小学生では無理なコースであることを報告しました。

飯田先生の「無茶振り」とも思える私たち学生への指示は、山ほどありました。それでも私たちは、その指示に背を向けることなく、むしろ楽しみながらチャレンジし課題を克服してきたように思います。先生の人を引き付ける魅力は、「野外教育学という学問領域を日本で確立させたい」「有能な野外教育指導者を育てたい」「子どもたちの成長を支援する有意義な野外教育の場を提供したい」という強い信念のもと、野外教育の振興のために様々な挑戦を継続されてきたことにあります。

飯田先生の強い信念に、当時は無意識であったと思いますが共感し、先生の思い・願いを少しでも実現していくことに喜び・やりがいを感じていた自分がいました。おかげで、ずっと先生の背中を追いかけながら、野外教育の世界に没頭することができました。感謝の言葉しか思い浮かびません。

1996年には、文部省（当時）における「青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議」の座長として「青少年の野外教育の充実について（報告）」をまとめていただきました。この報告書がきっかけとなり、国の野外教育関連施策が数多く展開され、特に子どもを対象とした自然体験活動が全国に広がりました。1997年には、飯田先生が中心となって準備を進められた日本野外教育学会が設立され、学会理事長・会長として学会を牽引いただきました。これらについては、依頼論文「野外教育研究に期待して」（野外教育研究第12巻第2号、2009年）、日本野外教育学会第十四回大会基調講演「野外教育の定義と体系化」（野外教育研究第15巻第1号、2012年）に、野外教育に

関連する当時の社会的背景・動向に加え、先生自らの関わりやお考えが掲載されています。

筑波大学、びわこ成蹊スポーツ大学、仙台大学、さらにはバラギキャンプ、花山キャンプなどで、数多くの者が飯田先生から教えを受けました。学ばせていただいた野外教育のすばらしさと可能性を、私たちはこれからもチャレンジ精神を忘れずに追求してまいります。先頭に立って切り拓いてこられた野外教育学会のさらなる発展を目指し、尽力してまいります。

この3年間は、新型コロナウイルス感染症の拡大により、子どもたちは自然体験活動の機会を十分に享受することができませんでしたが、感染症との共存という道を選択した今年の夏は、全国のキャンプ場から子どもたちの元気な声が空高くに届きます。天国から大好きな日本酒を飲みながら見守ってください。応援してください。飯田稔先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

**「やってみれば、どうってことないよな」
遠藤 知里（常葉大学短期大学部）**

飯田先生の思い出は、書き尽くせないほどたくさんありますが、シンプルに印象に残っている一言に「やってみれば、どうってことないよな。」があります。これは、2週間の長期キャンプの後で、飯田先生があるキャンパーに語り掛けた言葉でした。さらっとした一言ではありますが、多くのことを乗り越えてきたキャンパーの全てを肯定する言葉です。そして、その傍らにいる私自身の心にも、静かに響く言葉でありました。乗り越えてしまえば、どうってことないのです。何を乗り越えるのか…、それは、対象ではなく、行為そのものでもなく、自分自身を越えていくことだったのではないかと。そして、通り過ぎること・そこに留まらないことが大切で、つまり、次の自分自身を創る歩みが続けていくということは、「どうってことないよな」の繰り返しなのだと、今の私には思えるようになりました。

私自身は、大学1年生のときから飯田先生の花山キャンプにスタッフとして参加し、10年以上も野外教育の指導実践と研究の両面からご指導いただきました。それを振り返ると、意外なことに「こうしろ」とは言われていない…つまり、「自分で考えて、やってみろ」ということで、思うようにやらせていただいたことが心に残っています。もちろん、山ほどのダメ出しは頂

戴し、失敗したことも数知れず、ではあります。けれども、自分で考えて実行したことは、たとうまくいかなかったとしても、どうってことはないのです。必ず次につながるのですから。また、「経験のある他者から聞いて実行する」ということも、飯田先生のキャンプで学んだことのひとつです。例えば、キャンプで登山前日に、登山コースの情報を先輩から詳しく聞いて、子どもたちを連れていくことはよくありました。「（経験の浅い）私のためだけに下見を行う」ということは、まずないのです。他の学生も皆同じであり、鍛えられました。いつだったか、登山直前に何かの理由でコース変更を行うことになり、行ったこともない山道を、飯田先生から伝え聞いた話だけを頼りに、中学生キャンパーたちを連れて進んだことがありました。「こうやって行けば、国道のここに出る（はずだ）」ということで、信じて進むしかないので、思い切ってやれば解決できるということを学んだように思います。社会に出ると、大抵のことは、そのようにしてやっていかなければなりません。自然の中で学んだことが、ストレートに役に立っています。どうってことではないのです。

私は、大学院を修了するとき、飯田先生からのプレゼントとして「餅」を頂きました。もったいなさすぎて、なかなか食べることができなかったのですが、就職して4月に新生活が始まって多忙な日々の中、毎朝その餅を食べて、元気に乗り切ることができました。そういえば、花山キャンプの登山でも、食料に「餅」が入っていたことを懐かしく思い出します（餅は、下山後の昼食「カレーメン」になるわけですが、非常食としての意味合いもあったと思います）。登山に関連して、大学1年生のときに、飯田先生のキャンプに参加して初めて知った食材の一つに「うるめいわしの干物」があります。花山キャンプの1泊登山で、子どもたちに持たせる食料になっていました。今も、魚売り場で「うるめいわしの干物」を見かけると、子どもたちがソロに挑戦していた、栗駒山麓の大地森の風景や空気感が、自分の身体によみがえってきます。今なお、7月中旬の青空に向かって車を走らせるときに、40日間にも及ぶキャンプの指導実践が始まる日のような感情が沸き起こり、当時のことを思い出します。新しい私自身を創るうえで、本当にかげがえのない経験を与えてくださった飯田先生への感謝は尽きません。心よりご冥福をお祈りいたします。

第26回大会速報

山田 亮 (北海道教育大学岩見沢校)

7月1日(土)～2日(日)、北海道教育大学岩見沢校において、日本野外教育学会第26回大会を開催しました。新型コロナウイルス感染症の5類感染症移行後初の学会大会となり、完全対面形式での実施となりました。計画段階において、懇親会(情報交換会)の実施は見送ることとしましたが、基調講演、シンポジウム、研究発表、自主企画、エクスカージョンなどのプログラムを、これまでの学会大会を踏襲して、通常通りに実施をしました。

今大会は、参加者122名に、実行委員・講師・スタッフをあわせると160名程が、一堂に会しました。ほとんどの方が空路での移動という、かなり遠方の地方都市での学会開催に、これだけ多くの方々をお迎えすることができ、実行委員会として、大変嬉しく思っております。また、学会大会開催にあたり、北海道のアウトドアショップである株式会社秀岳荘の小野浩二代表取締役社長より、ご寄付を頂戴いたしました。ならびに、協賛各社・各団体の(一社)HOKKAIDO IKEUCHI OUTFITTERS、東商アソシエイト株式会社、(公財)日本アウトワード・バウンド協会、(一社)ウィルダネスメディカルアソシエイツジャパン、他23法人より、ご支援をいただきました。また、林野庁北海道森林管理局、北海道教育委員会、岩見沢市教育委員会より名義後援をいただきました。特に林野庁のお取り計らいにより、森林・環境関係の方々の新規参加・発表がありました。あらためまして、今大会の関係のみなさまに、深く感謝を申し上げます。

大会プログラムは、みなさまのおかげをもちまして、すべて滞りなく実施することができました。基調講演では、中村誠宏氏(北海道大学教授)より、北海道の森林環境について、気候変動と生物多様性の観点からお話いただき、自然環境をフィールドとする野外教育の今後の発展に向けて、さまざまな助言をいただきました。実行委員会シンポジウムならびに企画委員会シンポジウムでは、それぞれ、北海道で活躍されている教育活動の実践者の方々にお集まりいただき、野外教育の今後の可能性に言及されました。また、研究発表(口頭)は22件、研究発表(ポスター)は18件、実践報告は7件、自主企画シンポジウムは5件と、多く

の会員のみなさまからお申し込みいただき、さまざまな内容で、野外教育に関する議論を深めることができましたと思います。若手優秀発表賞(選考対象は11件)は、棟田雅也氏(鹿屋体育大学)「アウトドアスポーツツーリストにおける自然環境保全意識の先行要因と結果要因—トレイルランニングイベント『FORESTRAIL HIRUZEN-SHINJO』の大会コンセプトの理解度、満足度、および行動意図に着目して—」が受賞されました。大会初日の終わりには、総会を実施しました。総会は、第22回大会(仙台大学)以来の対面開催となり、あわせて、3年に一度の論文賞(優秀論文賞、奨励賞)の表彰式を行いました。さらに、今回は、大会日程前後に、北海道を代表するアウトドアフィールド(十勝岳、富良野、札幌、苫小牧、登別、洞爺湖)において、各実施者のご協力のもと、エクスカージョンを実施しました。参加者の方々からは、北海道の自然を楽しく満喫したと好評のコメントを多くいただき、実施者のみなさんからも野外教育学会とのつながりを持つことができよかったですとの声がありました。

野外教育学会の2回目の北海道開催を無事終えることができました。あらためて、今回お集まりいただいた方々に、感謝を申し上げます。誠にありがとうございました。ぜひもう一度、何かのかたちで、岩見沢にお越しください、お待ちしております。第26回大会の詳細の報告は、次号のニュースレターで掲載する予定です。

大会実行委員会より研究発表(ポスター)の発表取り消しのご連絡

以下の発表演題について、エントリー後に、辞退の申し出があり、実行委員長が了承しましたので、ご報告いたします。

演題番号 P-10

タイトル 「野外教育における冒険教育の定義およびC-Zoneモデルの解釈の再考—Adventure教育の概念普及とC-Zone回帰・再構築の必要性を伝える立場から」
発表者：石川国広(東京工業大学)



日本野外教育学会